別紙２

第２回広島市平和文化のまちづくり懇談会　議事（要旨）

⑴　説明事項

ア　ユース・ピース・ボランティアからの提言（若者の平和活動が生み出す力とまちの魅力創出）

ユース・ピース・ボランティア

ユース・ピース・ボランティアは、広島等の高校生や大学生で構成される団体で、平和記念公園で海外からの訪問者を英語で案内し、被爆の実相を伝えている。現在 138 名のメンバーが所属しており、これまでに 61 か国、計 1,632 名の方を案内してきた。

その中でも、私たちは、昨年 11 月から今年 3 月にかけて、被爆や核問題に関する専門的知識を身につけることを目的に専門研修を受け、2 つのグループに分かれて核兵器廃絶に向けた提言をまとめた。本日は 3 月 29 日に専門研修の提言報告会で発表した内容と、その後の成果等を発表する。

グループ A は、若者が主体となり核廃絶を訴えることを目的に置き、核抑止の不安定さを明らかにし、廃絶への支持を広げ、関連する政策を推進するため、ソーシャルメディアの活用が有効だと考えた。現在、核兵器に関する安全保障は、核抑止、すなわち、核兵器をお互いの脅威として突きつけ合うことで成立しており、絶え間ない緊張を生み出している。この仕組みは脆弱で真の安全を保障できないため、この緊張を取り除き、核の恐怖のない社会を実現するため、核廃絶が必要だと考える。本提案では、核抑止を支持する学生と核廃絶を支持する学生の双方を対象とし、直感ではなく「なぜ廃絶が必要か。」を明確に理解し、説明することが重要と考えている。このため、複数のソーシャルメディアプラットフォームを活用し、若者に働きかけることを提案した。例えば、共通の＃（ハッシュタグ）を通じて意見共有することで、多様な視点を可視化し、意識の向上と行動の促進につなげることができる。その目標は、核廃絶に向けた機運を高め、その重要性がより広く認識されるよう促すことである。それには動画の活用が、抑止リスクと廃絶の必要性を、感情面・論理面の両方から効果的に伝える手段となると考えた。

グループ B は、若者の連帯を通じた、核産業から平和産業への転換を提案した。これは、長崎研修時、多くの若者が核軍縮の重要性を理解しながらも行動に移せていない現状を学び、だからこそ、まずは若者同士がつながり動くことが第一歩ではないかと考えた。また、軍事産業や核産業に深く依存している国々があるため、これらの産業を転換させることが軍縮に向けた鍵になると考えた。具体的には、若者が核問題や平和について考える機会をより増やすべきで、SNS で「＃Peace Generation」を活用するほか、コーヒーやお菓子を片手に身近な話題から平和を語るカジュアルな場を作りたいと考えた。さらに、自治体との連携が重要であり、若者の活動を社会に広げるため、自治体の支援の下で若者主体の平和イベントやワークショップを開催すること、加えて、広告を通じて企業に働きかけ、企業と連携し平和の重要性への理解を促進することで、企業の政策や投資判断に影響を与えることができ、このような取組の結果、平和志向の産業への転換を促すことができると考える。

次に、第 11 回 NPT 再検討会議にユース・ピース・ボランティア代表として派遣された際に得た学びについて紹介する。広島での平和活動を発表したほか、現地の若者との交流、国連機関の訪問、核問題の最前線で活動している中満泉氏との対談など様々な経験をした。この中で最も感じたのが、理想と現実のギャップ。これまで核兵器廃絶を目標として学んできたが、実際に NPT 再検討会議の議論を傍聴する中で、依然として国際社会での核抑止論の大きさを実感した。一方、現地の専門家からは、「若者の思いや行動こそが未来を変える力になる」という強い言葉をいただいた。この経験から、平和を理想とするのではなく、現実問題として向き合い、考え続けることが大切だと学んだ。そのためには対話が欠かせない。異なる価値観の人とも対話を重ねることで、お互いを理解し共通点や共通の目標を見いだせると実感した。また現地で、同じ思いを持つ多くの若者と出会い、仲間をつくる大切さも感じた。仲間とつながることで、自信や勇気にもつながり、大きな力に変えられると感じた。

次に、9 月開催予定の対話イベントで行いたいことを説明する。まず、現段階での計画は、資料館を訪れた外国・日本の 10 代から 30 代の若者と共に、資料館を見てどう思い何を感じたか、話し合う機会を設けたいと考えている。若い世代に絞った理由として、提言のとおり、若者主体で動くことで、つながりを生み、大きな輪を作り、行動に結びつくと考えたため。今回は、学生含め、社会人や家族連れなど様々な若者の意見を聞けたらと考えている。日程は、2026 年 9 月 12 日、13 日、19 日に資料館東館 1 階で予定している。

最後に、被爆者の声を直接聞くことが難しくなっている今、将来を担うのは、若者の責任だと言える。そのため、若者ならではのアイデアを生み出し、これまでの核廃絶への取組を大切にしながら、新たな多角的な視点からのアプローチを生み出していくことが、求められていると思う。

（提言に関する意見交換）

前田委員

広島では若者流出が問題となっている中、先ほどの提言では仲間づくりや若者が行動する重要性を強調されていたが、こうした活動を進めるためには、もっと多くの若者に広島に来てもらい、住んでもらって、輪を広げていくことが大事になると思う。平和産業の振興という提言もあったが、地元の産業発展のためにも、なおさら広島に若い力をもっと増やすべきだ、となると思う。平和の問題を中心に活動していると思うが、今の広島の若者の流出を踏まえて、今後、どのような活動ができるか、そういう視点で考えたことがあるか、聞きたい。

ユース・ピース・ボランティア（北薗さん）

まず、若者の人口流出を防ぐためには、他県とは全く異なる、広島ならではの強みを活かすことが大事だと思う。そこで今回の懇談会の趣旨にあるとおり、広島の街づくりと、広島ならではの平和の取組を組み合わせることが一つの手立てだと考える。

まず、若者がこうした平和活動に取り組むことで、これまで知らなかった広島の歴史や取組を知り、それが、街への愛着や街を誇りに感じるきっかけになると思う。それによって、「被爆した悲劇の街広島」というイメージだけではなく、多文化共生であったり、活力ある広島、というプラスのイメージに変換することで、自分の街を好きになるし、これからも発展させ続けたいという強い思いが根付くと思う。なので、現在、私たちが行っている平和活動を、街づくりの一つとして取り入れることは、非常に大事な観点だと思う。

ユース・ピース・ボランティア（中村さん）

広島では幼い頃から平和教育を受ける機会が多く、ずっと学んできたことに負担を感じている人も多くいると思うが、それが「当たり前」との認識で終わることがもったいない。広島は特別だという認識を広めていくことで、広島でこんな活動がしたい、広島だからできることだ、という意識を若者の中で浸透させることができ、広島への愛着が湧き、人口流出も抑えることができるのではないかと考える。

イ　幅広い国・地域の市民が評価している資料館のなくてはならない役割
資料館混雑による支障と終日予約入館の効果
被爆 100 年を見据えた未来志向の平和文化のまちづくり（案）

事務局　資料４～６について説明

⑵　審議事項

平和文化のまちづくりについて

八幡委員

本日は広島の街が今後どのように平和を発信すべきかという視点で 2 点述べる。

まず、資料館について。アンケート調査結果から、来館者が評価している資料館のなくてはならない役割を改めて感じるとともに、更に世界中の多くの人が訪れてほしいと思った。資料館の混雑解消に向け、お盆時期に終日予約入館を実施したが、やや混雑が解消され安全な見学ができた反面、受入人数が限られるという問題も生じた。

被爆者がますます高齢化している中、被爆体験証言者の願いとして、ただひとつ、世界中の人々に「ヒロシマの心」を伝えたい。平和を願う特別な場所である資料館として、かけがえのない役割を果たすため、緑豊かな平和記念公園に相応しいゆとりが欲しい。第 1 回の懇談会でも述べたが、本館と繋がる国際会議場をできるだけ早く資料館にしてもらいたい、また新しい施設を作るのであれば、一日でも早く実現してもらうことを、心からお願いする。

２つ目は街づくりについて。思えば被爆当時８歳だった私も、大変辛い日々を過ごした。夕食時に、どんぶり一杯の重湯で「すくうても、すくうても、ご飯が出てこん。」と泣いた３歳の弟の泣き声が今も耳に残っている。こうした中でも、家族の団らん、地域の優しさ、季節の行事に恵まれ、お正月やお花見、ホタル狩り、海水浴や盆踊り、演芸会の度に心を躍らせた。母が、なけなしの着物を麦やお米に変えてお弁当を用意してくれたことも覚えている。焼け野原となったこの街で、私たち被爆者は、辛い局面をなんとか乗り越え、節目で得た達成感を噛みしめながら、今日まで生きてきた。戦後のイベントやスポーツ観戦による賑わいは、市民が娯楽に浮かれていたわけではなく、辛い日々を生き抜く心の支えであり、絆を深め、鎮魂の念を捧げる場でもあった。

今、広島は大きく復興を成し終え、賑わいの施設に、多くの人が喜びや楽しみを求めて集まっている。こうした楽しい思いも知らず無念の死を遂げた被爆者に真に報いるためには、被爆の惨禍を人類の教訓とし、二度と戦争のない時代を幸せに生き、さらに次世代に平和な未来を残すことが、今を生きる私たちの使命だと思う。来広者が、原爆被害を学び、賑わい、伝統文化、音楽や芸術のような平穏さを感じつつ、未来志向の平和を自分ごととして紡ぎ出し、希望を持ち帰ってもらう。こうした街を、多くの方々に作っていただきたいと心から願う。

椋田委員

私は、戦後の昭和 21 年に呉市で生まれ、広島には小学校の遠足で復興博覧会に行き、100m 道路の道端にある石に座り、お昼の弁当を食べた記憶がある。最近の話題では、サッカースタジアムが「ピースウイング」と命名され、本当に良かったと思う。あと、先ほど提言されたユース・ピース・ボランティアの活躍が、本当に頼もしく、素晴らしいと感じる。

アンケート調査結果にも関連するが、展示を見て負担を感じる人がいることは間違いない。私も学校で資料館を見学し、さらに個人的にも３回ぐらい入ったが、それからは行っていない。沖縄の「ひめゆりの塔」も２回行ったが、本当に悪寒を感じ、それ以降は行ってない。

そう考えると、広島らしい平和を知ってもらうには、まずは資料館などに来ていただく環境作りが大事だと思う。昨日、袋町小学校と本川小学校を見学したが、本川小学校には、被爆後の教育のために、アメリカの教会から文房具が贈られ、そのお礼に小学校 5 年生が書いた綺麗な絵や手紙が展示してあった。悲惨な環境の中で、よくこれだけのものを書いたし、残っているものだと思った。広島のこうした実態を、できるだけ冷静に知ってもらうには、やはり来ていただくことが一番大事だとつくづく感じる。正直、私も資料館を敬遠しかけていたが、こうした展示を見た時に「ああ、こういう時代があったのだ。」と思い出した。

今、広島の街が平和だからこそ、スポーツ、広響、文化を楽しめる。そう考えると、資料館に加えて、広島の街を回遊して、案内板も用意して、途中で被爆建物や被爆樹木などもきちんと見て欲しい。また、広島は川辺が綺麗で、緑があり、休憩できるし、このように回遊したいと思うきっかけづくりの情報提供をしっかり行うことも必要。それによって、広島に来て、資料館を見学してくださいという実体験をしてもらうことと、広島がみんなで協力して立ち上がった復興の素晴らしさを、もっと上手に宣伝することを考えなければならない。昨日の八幡委員と一緒に袋町小学校と本川小学校を視察し、つくづくそう感じたし、また若い世代のボランティアにも協力しながら、本気でこのような街づくりを考えなければいけないと思った。

私共公共交通の会社としては、街を循環しやすいように、電車やバスだけではなく、グリーンスローモビリティや自転車などが全部一貫して使える街になるよう目指さないといけないと、つくづく感じている。

箕輪委員

広島との接点を考えてみたところ、小学生の時に親が買った広島復興のための鉛筆を使った思い出があったが、広島に来て資料館等を見て「なるほど、こういうことがあったから、関東の子どもたちに、鉛筆を配布して、復興のための資金集めをしたのかな」と思った。

アンケート調査結果でのキーワードは「人類共有の財産」という言葉だと思う。この言葉は、一つは、来広者の記憶に原爆の凶暴さを残す場所という意味合いと、もう一つは、広島に住む私たちは、この財産を守り、育てていく責任を背負っている、とも取れると思う。

長期的な視点で資料館の在り方を考えた場合に、財政的な問題は避けられない。現状は、入館料だけでは運営費用は賄われていないとのことであり、そうなると入館料引上げの議論になるが、広く被爆の実相を知ってもらう目的を踏まえると、入館料はなるべく安く、又は無料という考えもある。悩んだ時、私は原点に返るようにしている。ここで、広島平和文化センターの設立趣意書には「財政的にも広島市からの助成を基に、ひろく一般から独自財源を求め蓄積しながら、安定した基盤によって永続できる平和の推進体制を確立することが望ましい。」とあるが、その前に「広島平和文化センターを従来の市の特殊な行政機構としての段階から、自由にして、かつ、機動性に富む全市民的な財団組織に進展させることが望ましい。」と記載されている。要は、広島市から助成が行われる前提ではある一方、「自由にして、かつ、機動性に富む」ということは、市からあまり干渉されないように、財源を自らきちんと確保しなさいよ、との意味であり、その中には、入館料の引上げも射程に入っていると思った。

それを踏まえ、どう引き上げるのか。例えば、二重価格やファストパスなど色々なやり方があるが、私はそのような制度設計を早めにやるべきだと思う。私はずっと災害のニュースを専門で行ってきた。南海トラフは必ず起きるわけで、国の発表では、太平洋ベルト地帯に被害が出ると 30 万人が亡

くなり経済損失は 270 兆円とのこと。こうした事態になれば、国内や海外の人がこの資料館を見に来てくれるだろうか。そうなると、入館料収入は無くなり、1 年や 2 年で済む話ではない。国内での復興や、当然、広島市でも復興にお金を使わなければならないので、資料館への助成もできない。よって、今後も自律的に資料館を残せるよう、今の段階で考える必要があると思う。

松藤委員

ユース・ピース・ボランティアのお二人から平和への思いを聞き、本当に頼もしいと感じるとともに、転出超過といった広島の課題についても真摯に考えてもらっていると思った。特に若い女性の転出が多い中、先ほど発表されたような現実について、我々は具体的に知り、これからどう進むべきか考えなければならないし、世代の垣根を越えて、皆さんと一緒に広島の将来像を考えていきたいと思った。

昨日、袋町小学校と本川小学校を視察した際、感じたことを述べる。今、様々な変化が生じており、平和に向けた取組も、時代とともに変わってきていると思う。この懇談会でも、「復興」にフォーカスされ始めており、この方向性は正しいと思う。ただ、やはり原爆がもたらした悲劇をしっかりと認識することが大事であり、全てはそこから始まる、ということを強く感じた。そういう意味で、この視察は非常に貴重な体験になった。平和記念公園の中ではなく、実際に被爆した当時を、そのまま体感できる場所であることに意味がある。それができるのは、やはり広島しかない。視察の際、袋町小学校の校長先生から「ここには失われた過去、現在、未来を見ることができる窓があります。」と教えていただいた。窓からは、被爆当時、そして今、さらに未来を生きる子どもたちの姿を見ることができる。また、復興してきた袋町のプライドを伝えたい、と熱く語られたことも印象に残っている。

企業が復興に取り組んだプライドを示す「プライド・オブ・ヒロシマ」も、今後は、企業だけでなく、是非、行政、教育現場、民間、商店街などの様々な視点からの復興、イコール広島のプライドを伝える場としていくことが必要と感じている。

ここで一昨日インドネシアの総領事が来広された時におっしゃった言葉が非常に印象的だったので、紹介する。「世界にとって、広島は戦争がもたらす壊滅的な結果を強く思い起こさせる存在です。しかし、今日の広島はさらに深い物語を世界に語りかけています。それは復興、和解、平和、そして希望の物語です。歴史は単に記憶されるだけでなく、未来への知恵に昇華されるべきであることを教えてくれます。」と語っていただいた。是非、この復興の物語が、未来への希望につながっていくというストーリーを考えていけたらと思う。そして、広島の復興を伝える場所については、「プライド・オブ・ヒロシマ」は平和の軸線上にあるにもかかわらず、残念ながら、資料館の来場者の流入にはつながっていないと思うので、資料館の中で展示することも含め、展示場所はどんな姿が望ましいのか、復興と平和の回遊、街づくりのあり方について、皆さんと意見を出し合っていけたらと思う。

最後に、改めて、広島の過去だけに囚われず、未来志向がはっきり伝わるような街づくりを推進していく必要があると思う。そして、一度で回遊しきれなかったら、何度でも広島を訪れ、次はあの被爆建物を訪ねて物語を感じ、復興を感じて元気になり、さらに、滞在し、美味しい食事もしてもらい、その度に深く平和と未来に思いを馳せていただける場所となるような街づくりを目指していく。それこそが、平和都市、文化都市広島の役割だと思う。椋田委員がおっしゃったように、「来ていただく」ことは大事で、さらに知っていただく、そのための上手い情報発信の仕方も、今後大事になってくると思う。

前田委員

そもそも広島の「平和文化の街」というイメージが、どれぐらい全国の方に浸透しているのだろうか。

私たち広島にいる者は、当たり前のように、プロスポーツチーム、交響楽団、大学などが街にあり、平和であり、安全であることを当然に思ってきた。そして、その前提として、過去の歴史があったが故に、当たり前のような今の「平和文化の街」広島があるという認識がある。しかし、こうしたブランド・イメージは、全国の方、特に若い世代には、過去の歴史に関する認識がない地域では、今の広島の状況は他の土地とほぼ同じに見えてしまうので、うまく定着しないのではないかと思う。広島が、「平和文化の街」だから、「広島はすごいんだ。広島に行ってみたい。広島に住んでみたい。」といったイメージ作りが必要だが、そのブランド・イメージがなかなかない。広島に住む私たちからすると、訴えたい広島の良さはいっぱいあるが、そうではなく、逆に広島がどのようなイメージを持たれているのかを客観的に見た上で、私たちが思っている「広島は『平和文化の街』です。すごく住みやすい、未来志向の街です。」といった良さが、外の人のイメージに直結するような流れを作る必要がある。

すなわち、広島の街のイメージは、このように、中にいる人と外にいる人で大きく異なるのではないかと思う。それは、広島では平和学習を受けているからとか、そうじゃない土地にいるからとかもあるかもしれないが、やはりそれを超えて「平和文化の街」であることのブランド・イメージを確立して、「だから広島に住みたい。広島に来たい。」と思えるような流れは、是非作るべきであり、そうした流れは、各方面において作る必要がある。

西尾委員

「平和文化の街」における、被爆体験と復興体験をそれぞれ伝達する二層構造を中心に３点申し上げる。

まず１点目、被爆の実相と復興について、語らいの役割を分担することこそが周遊促進のまちづくりの革新である、と改めて感じた。資料館が担う被爆の実相を認識する場所があり、広島ゲートパークなどが担う復興の歴史や現代の若者との語らいの場があるというように、役割を明確に分担した上

で、その間の周遊を促進することが最も肝要と思う。そして、被爆の実相を伝える「入口」と、復興や未来への希望を語り合う「出口」がそれぞれ独立して存在するのではなく、相互に送客し合う関係を設計することで、来広者は、広島の過去、現在、そして未来へと続く一つのストーリーを体感できる。このような被爆の実相・復興・未来の役割分担と回遊性の向上こそが、平和文化を基軸とした街づくりだと思う。

2点目、「プライド・オブ・ヒロシマ」などのサテライトとしての活用について。「コア」である資料館や平和記念公園、「サテライト」である地域の歴史や文化資源があり、これらを結びつけるといった考えは、「エコ・ミュージアム」構想とも合致しており、その中で、「プライド・オブ・ヒロシマ」や、今後の展開を検討中の VR 体験は、まさに広島の復興の歩みを体感でき、語らいの機能を担う実践の事例だと思う。一方、そうした施設を民間が運営する場合、民間が直接個人の旅行者に広報するのは認知度、集客力といった点で課題があるため、現在、団体旅行、修学旅行等への依存が非常に高くならざるを得なくなっている。このため、例えば、これらの施設を資料館のサテライトに位置付けて、ホームページで紹介したり、様々な案内資料に掲載するなど、平和の軸線上や平和学習の延長線上にある施設として広く周知する仕組みを検討してほしい。

最後3点目、平和学習の情報発信と資金等を循環させる仕組みづくりについて。修学旅行を担当する先生方に丹下健三氏による平和記念公園の構想や北側エリアの意義について話すと、多くが「是非、生徒を連れて行きたい。」と言う。つまり、ニーズはあるが、知られていないため、訪問につながっていない。このため、資料館や平和記念公園を起点として、その先にある復興や未来を考える場を知ってもらうきっかけを積極的に提供してほしいし、我々も積極的に取組みたいと思う。

また、平和文化の推進は、市民、企業、学校が主体的に関わることが重要である。地元企業が平和の取組を主体的な活動に位置付け、また学校が平和学習のあり方を時代に合わせて発展させることで、平和づくりの取組は持続可能なものとなる。そのためにも、平和とビジネスを結びつけ、資金や人材を循環させていくための仕組みづくり、いわば「ピース・マーケティング」という考え方を取り入れながら、企業や学校が平和文化の担い手として参画できる環境づくりを進めることが重要だと思う。

佐々木委員

エコ・ミュージアムとナラティブに関して、その後考えたことや、袋町小学校・本川小学校を視察して更に強くなった思いを述べる。

前置きとして、本日昼食を取っていた際、近くにいた女子高校生 2 人の話を、聞くとはなしに聞いていた。カープの試合や韓国アイドルの話をしていたが、その次いきなり NPT 会議の内容が話題になり、それが一番盛り上がっていた。私が住んでいる札幌ではこういう話の展開はないが、まさに先ほどのユース・ピース・ボランティアの活動が、こうした会話にも波及しているのかなと思った。

まず、１つ目のエコ・ミュージアム構想について。

私は、東日本大震災以降、色々な場所を見て回った。その際、遺構として残されている仙台市の荒浜小学校や石巻市の大川小学校と、仙台市の「メディアテーク（多くの映像のアーカイブを有するミュージアム的機能を持つ。）」は、全く性格は異なるが、お互い補完し合う関係になっていると思った。今回、袋町小学校・本川小学校を視察した際も同様に感じ、資料館とこれらの施設は、まさに、お互いが補完し合っている関係だと感じた。

つまり、資料館の資料は、ある意味、様々な場所にあった物を集めてきたもので、それを展示している。時代性では「80 年前」で括ることができるが、場所については、博物館の宿命だが、暴力的に持ってきて展示している面がある。一方、昨日視察した本川小学校・袋町小学校では、まさに、その場所で起こったものが、破壊されたままの状態で残っており、焼け焦げたものもあるくらいで、リアリティに凄い力があった。石巻市の大川小学校を見た時にも感じたが、展示の仕方は不十分で、説明不足かもしれないが、それを十分に補って余りあるインパクトがある場所だと思った。まさに、こういう施設をつないでいくことがエコ・ミュージアムの考え方なので、広島でも上手くエコ・ミュージアムを実現できそうな可能性を感じた。

もう１つの、ナラティブについて。

私も、袋町小学校で校長先生が言った、「資料室の窓から見えるグラウンドの光景に、私（校長先生）は、過去、現在、未来を感じる。」という一言が一番印象に残った。経済評論家の加谷珪一さんが、次のようなことを言っている。今、印刷物がデジタル化され、部数が増えない中で、絵本を含めた児童書は部数を落とさずに売れている。スマホやタブレットで子どもに読み聞かせはしないし、幼稚園でも分厚い紙で読み聞かせる、つまり、「コンテンツとコミュニケーションが一緒になることで、相乗効果や今までなかった付加価値が出てくる。」と言っていた。

また、今流行りの「文学コミケ」は、ネットで自分の小説を売ってはいるが、小説家ではない一市民とファンが集まり、コミュニケーションする場であり、東京で年何回か設けられている。こうした場も同様で、コンテンツとコミュニケーションがセットになっている場だ、と加谷さんが言っていた。

昨日袋町小学校の校長先生の話を聞いて、あの場所は一つのコンテンツとしての場だと感じた。校長先生は「袋町小学校近くに祖父が住んでおり、当時はそのことを知らなかったが、校長になった時に知り、祖父がこの学校に呼んでくれたのではないか。」と話した。続いて「今、この窓から見えているグラウンドは、81 年前に原爆で何十人、何百人の子どもが亡くなった。でも今ここで運動会や活動をしている子どもたちがリアルにいて、その子どもたちは未来の平和に向けて、展示室で来館者に対して解説活動も行っており、３つの時制がグラウンドの中に全部見えるので、私が一番好きな窓です。」と話してくれた。私はそこに校長先生の強いナラティブを感じた。自分の過去が全部今の仕事につながっていく、そうしたコンテンツとナラティブは、まさにコミュニケーションであるし、昨日の校長先生の言葉で、コンテンツとコミュニケーションが一緒になった空間と瞬間を味わわせてもらったように感じ、改めて、ナラティブは人を動かす大事な要素であると思った。

久保委員

袋町小学校の視察の話があったが、私は、袋町小学校の卒業生で、当時の学校の地下室には色々な遺留品が置いてあり、みんな地下に行くのを怖がっていた。掃除に行くのもいやで、怖いイメージしかなかった。

反戦、核廃絶と色々なことがあるが、「平和の心」を持つということがまず大事であり、そしてそれが、みんなが「平和の心」を持つことにつながっていくことが大切だと思っている。

スポーツという観点では、今年もピースウイングでピースマッチを行った。2 万 8,000 人が集まってくれて、県外からも 6,000 人強の方に観戦いただき、全員で黙祷をした。その時、スクリーンに、5 歳か 6 歳の子どもがいる家族が黙祷している姿が映し出されたが、そういった一つ一つが「平和の心」、平和の想いにつながっていくのではないかと強く感じた。マツダスタジアムではピースナイターも実施しており、こうした様々な場面で平和に関する体験をすることは、「平和の心」を持つことにつながる。

このため、8 月 6 日から 1 週間を「ピースウィーク」として、みんなが平和を考える期間にしてはどうかということを提言する。「平和」をテーマにした習字でもよいかもしれない。ある人は「絆」と書くかもしれないし、「愛」とか「友情」かもしれない。

そのように様々な場面を通じて、一つ一つ池に小さな石を投げるように波紋として広がっていく、これが平和学習のスタートではないかと思う。

岡畠委員

2 点ほど話をさせていただきたい。アンケートの自由記述を読んでいると、「物語性」というキーワードが非常に強く出ていたと思う。例えば、死斑が出た兵士の写真が非常に印象深いという結果の背景には、写真を見た方が、この兵士はどんな思いで写真を撮られたのだろうかといった想像力を掻き立てられ、色々と感じているということがあった。このように遺品一つ一つに様々なストーリーがあることを見学者が感じ、それが非常に大きな感動に結びついていくということなのだと思う。

私は、中国新聞の記者出身であり、原爆や平和報道に多少携わったことがある。中国新聞による平和報道の原点は、「原爆は、破壊力で知られたのか、人間的悲惨として知られたのか。」という問いかけであり、この問いかけをしたのは、昭和 30 年代に論説委員をしていた金井利博氏で、大江健三郎さんのヒロシマ・ノートに出てくる方である。核抑止論の根底にはこの「破壊」がある一方、「人間的悲惨」という部分が抜け落ちているから、軍拡競争は止まらない。昭和 30 年代の言葉なので、米ソの核競争が非常に激しかった頃の問いかけである。メディアが広島を語るとき、この「人間的悲惨」、いわゆるストーリーが抜けてはならない。徐々に生の証言者である被爆者が少なくなっていく中で、その色々な物語をどのように街に刻み込んでいくのかが、今後の広島の街、資料館のあり様にも関わってくると思う。そして、このような物語を伝え続けていくということを考えていく必要がある。

それともう１点。前回の懇談会でも話をしたが、広島の平和発信を資料館だけに負わせるのは非常に酷な話であり、やはり街全体で平和発信をする取組が必要だと思う。被爆建物、被爆遺跡、本川小学校や袋町小学校、そうしたサテライト的なものにもそれぞれストーリーがある。慰霊碑一つとってもストーリーは必ずあるわけで、そうしたストーリーを集めていくことも必要だと思う。

アンケートにもあったように、インバウンドの方が広島の街を歩く中で、「復興」というキーワード、原爆がもたらした瓦礫と今のこの姿との対比に、非常に感銘を受けている。そうした街の強さ、平和発信の強さに、さらに復興や平和を求めるストーリーを加えることができれば、更に大きな力になり得ると思う。

最後に、広島電鉄の循環線では、乗客が被爆後の写真や映像を見て、今の街の姿と対比してもらう取組をされると聞いた。私は非常に関心を持っている。この取組は非常に面白く、実体験として感じる部分がより強くなると思う。是非、取組ができるだけ長く続くことを期待している。

上田委員

袋町小学校と本川小学校の視察には行けなかったが、私も、久保委員と同様、袋町小学校に通学していた。私は、昭和 20 年生まれで、昭和 27 年から 32 年まで、当時住んでいた鷹野橋から袋町小学校に通った。印象深かったのは、あの辺りは、日銀と芸備銀行が高い建物で、あとは真新しいアメリカ文化センター、その他はほとんどフラットな空間だったことだ。

私たちの時代は「学校の地下には行ってはいけない。」と言われていたが、危ないと言われると子どもは行きたくなるもので、何度も地下に行った。鮮明に覚えているが、私たちの首まで浸かるくらいの高さまで水が溜まっていて、原爆の犠牲になった子どもたちが使っていた机がたくさん浮かんでいた。

また、当時はまだ原爆ドームに自由に入ることができ、中に入るといつも蝋燭が点いていた。そこで、大人も子どもも「原爆を許すまじ」を歌う。子ども心に死者の霊魂が脳裏に焼き付き、今も残っているような、そんな経験をした小学校時代だった。

前回の懇談会で椋田委員が「被爆後の広島をわしらがなんとかせんといけんと思って頑張ってきた。」と言われた。昭和 20 年代生まれの委員もおられ、「なんとかこの街の再構築を」との思いで、必死になって今日までそれぞれの役割を担ってこられたと思う。

そこで、今日は、「若者への視点」というテーマで、自分なりの思いをお話しする。私は、被爆２世、被爆３世という言葉を聞いたとき、大きな違和感を感じた。私たちのような伝統文化に携わる人間からすると、どこか伝統文化を継承するかのようで、原爆の悲惨さが伝わらないような言葉だという感じがした。しかし、八幡委員の本当に心を打つ話を聞いたり、また、昭和２０年代の被爆の悲惨さ、あるいは、死者の霊魂を感じる時代の人たちが、そう遠くないうちにいなくなることを考えると、

被爆のことも、文化や歴史の継承のような部類に入りつつあるのかもしれないと最近思い始めた。昔からよく「100 年以上継承された企業は文化を持っている。」と言う。大変な被爆からあと 20 年経てば 100 年である。「被爆には、歴史文化的な要素も入りつつある。」ということを認識しながら、どのようにするかを考える時代に入りつつあると感じている。

私は上田流の 16 代目であるが、被爆後、伝統の歴史や文化の継承の厳しさを日々感じながら今日までやってきた。おそらく 30～40 年前からだと思うが、毎朝、上田流の継承について、「伝統を継承する。」、「祖君（そくん）を継承する。」、「師家（しけ）を作る。」という 3 つのことを声に出して言うようにしている。

「伝統を継承する。」というのは、上田流の歴史の根幹を伝えるということである。

また、「祖君を継承する。」というのは、上田宗箇の残した形あるものを継承する、無くなったものは再現・復元をしていくということである。

最後の「師家を作る。」のうち、「師家」、「師の家」は、禅の言葉で、師匠から印可（いんか）状を与えられ、継承する資格を持つ後継者を言う。そして、そうした者をどれだけ私が作れるのだろうかということを毎日唱えている。本日のユース・ピース・ボランティアの話もまさにそうで、揺るがない使命感を持つ平和活動の核になる人をどれだけ育てられるか、それが特に大事だと思う。

松井座長

自分の育った広島という街で、このような議論のできる環境があるのはすごく素晴らしいことだと思っている。

一方で、今朝方、ある大きな会合に参加した際、体験したことについて述べる。その際、組織の代表者と思われる方は、平和とは、観念的なものではなくて、具体的にどう対処するかが重要だと言っていた。これに対し、私は、平和を作り上げることは、平和をこういうものにしたいという観念、頭の整理がないとできないと思っている。その意味で、観念的なものを大事にすることをしないといけないと思うし、何か物理的にやって、それが平和というのは、あまりに即物的であると信じている。

この懇談会での議論も、心の問題が重要で、根源として人を大事にするし、もし自分が殺されるのが嫌だったら、相手の生命を絶つことはしないということをまず前提にしてどう考えるか、ということから入らないといけない。

国という境界線を巡っての、核を持った国の武力行使などの脅しには、脅しで返さないといけないと思う住民もいるかもしれないが、国を守るとはどういうことなのか。人と国境と統治システムという 3 つの要素がないと国とは言えないとすれば、国を守るために生命を持っている人々が死ぬということがあってもよい、国を守るためには自分たちが犠牲になってもよいと簡単に言えるのか。人間には一人一人に物語があるにもかかわらずである。

核抑止力が必要だと言っている方と、じっくり対話してみたいと思っている。暴力を駆使して自らの思うままにしたいという集団がいたときに、こちらも脅せば収まると言う人もいるが、脅し返すと、脅してきた相手に更なる脅しや暴力を振るう口実を与えることにならないか、というのが私の発想である。だから、あえて脅しを肩透かしにする気持ちで、あるべき姿を皆で共有して、それを実現するために知恵を出して、工夫して仲良くしようと言いたい。しかし、これがなかなか難しくて、脅しには脅しでという論調になってしまい、国を大事にしないといけない立場なのに、相手をやっつける工夫をするという自己矛盾に陥ることになる。

この懇談会での議論が、力による平和などを唱える方々の心にも響くものとすることが、広島の街づくり、平和文化を構築していく上で、絶対に欠かせない要素だと思う。

（議論を踏まえた意見）

椋田委員

昨日、袋町小学校を視察した際、夏休みだったので児童がいなかったが、普段は 5 年生の児童が平和資料室を案内すると聞いた。私が小さい頃だったらあのような資料室には行きたくないと言っていたと思うが、2 年生ぐらいから 4 年生までは掃除をしたりして資料館に親しみを持たせ、5 年生になったら案内をさせ、6 年生では、街中へ出て地域の方から被爆の経験を聞いて回るということだった。

今日のユース・ピース・ボランティアの話を聴きながら、昨日視察した両校でも平和活動を担う後継者が少しずつ育っているのかなと感じた。次は、学校の授業開始後に、もう一度行ってみたい。